
魔法先生ネギま！ ～光と闇と龍と～

ヨシュア 13 世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～光と闇と龍と～

【Nコード】

N2087S

【作者名】

ヨシユア13世

【あらすじ】

基本的に原作沿いで進みますので長くなると思いますが頑張りたいと思います。

はじめに

特に投稿の予定の無かった作品ですが、なんか投稿できそうな具合になっていたので投稿する事にしました。

内容は魔法先生ネギま！ の二次創作となっております。何気に初投稿だったりするので至らない点は多々あるかと思いますが、頑張っ
ていきたいと思っています。

え？ あらすじ的なもの？ そうですねえ……個人的にこのちゃん
が好きなのでオリ主とこのちゃんがらぶらぶする話になる予定では
います。基本原作沿い（沿いすぎ）なので、アンチ原作沿いの人
にはオススメは致しません。

プロローグ（前書き）

ネギ君はしばらく出てきません

プロローグ

―1月某日―

「では、今日から孫娘のことよろしく頼むぞい」

早朝……ここ、麻帆良学園の学園長である近衛近右衛門に呼ばれ、学園長室に入るなりそう言われた。

「はい……」

呼ばれた意味が分かっていた俺は返事をして頷いた。……俺は男子中等部『元』2-Aの生徒だった。……『元』がつくのは理由がある。それは……

「とつぜん男子中等部から女子中等部に移るのは大変じゃと思うがここは一つ、頑張つての」

「ええ……大丈夫です」

という訳である。先ほどの話に出て来た『孫娘』の護衛。それが俺の役目であり、この学園に呼ばれた最たる理由である。そして、その護衛のために俺は男子中等部から、女子中等部に移される事になった。

「ほ、言い忘れとつた。……くれぐれも魔法は人に見られてはいかんぞ？」

「分かってます」

魔法……自分では良くわからないが魔法使いとしての腕が買われたらしく、俺に護衛任務の白羽の矢が立った。

「それと、女子中等部の校舎は初めてじゃろうから孫に案内を頼んでおいた」

「それは……どうも」

別に道に迷おうが護衛出来ればそれで良いんじゃないだろうか？
わざわざ大事な孫を野放しにする意味が分からない。……この学園のセキュリティを疑っているわけではないが……。

そこで、俺の後ろから戸を叩く音がする。

「おー、待っておったぞ」

どうやら件の孫娘が来たようだ。

「失礼します」

「……失礼します」

のんびりした声と少し緊張した感じの声とともに2人の女生徒が入ってきた。

近右衛門「うむ。では予め言っておいたように彼を教室まで案内してくれんかの」

「うん、わかったえ」

この、のんびりした声の方が近衛木乃香。学園長の孫娘……即ち俺

の護衛対象である。そしてもう一人は……誰だ？

「……」

理由は知らないが、さっきから黙ってたままだ。

「アスナどうしたん？」

（アスナっていつのかコイツは？　しかしまあ……どうでもいいか。
俺の任務には関係のない事だ）

「やっぱり反対です！学園長！！」

いきなり大声を出して机を叩き出した。

「ほ？」

「ひゃあ！　びつくりしたあ……アスナでないしたん？」

「なんでいきなり「共学」なんですか！？」

「まあまあアスナ落ち着いて……」

「これが落ち着けるわけ無いでしょ！　共学よ共学！？　男子が混
じんのよ！？　このかはどうなのよ、嫌じゃないの？　もう気楽に
体重増えたとか胸おつきくなったとか話出来ないのよ！？」

「今普通に話とるやん……あや？」

アスナとか言う奴に言った後、俺を見て首を傾げた。

「？」

なんだ？

「あれ？　ウチら……どっかで会ったこと無い？」

「！」

まさか……覚えているのか？

「へ？」

「なんじゃと!？」

学園長が一番大きく反応した……？　まあいい、それより……

「……いや、他人の空似だろう。俺は君に会ったことは無い」

……俺は嘘をついた。本当は……小さい頃に一度だけ会った事がある。しかし、微かにでも俺のこと覚えているとは……。それに俺の事は覚えていても良い事なんかない。光の下で生きる彼女にはなんら良い事なんて……

「そっかなあ？　でもどこかで見たような……」

少しがっかりした様子の近衛。そして何故か学園長が俺を睨んでいるが……気にしない事にしよう。今はとりあえず――

「――とにかく部屋を出ないか？」

ずっとここにいるわけにもいかなかったので俺は二人にそう提案した。

「あ、せやな。ほら、アスナもずっと文句言つてないで早よ教室いくえー」

「……分かったわよ」

まだ言ってたのか……？

「ほ、そうじゃ忘れとった」

┐
?
└

俺を含めて三人が同時に振り向いた。

「共学中試験中、君は女子寮に部屋を設けておるからそこで過ぐすようにの？」

「はい？」

女子寮にいる必要性は皆無だと思っただが……

[illegible]

アスナとか言う奴が叫ぶ。

「どういふことですか、学園長。俺も初耳ですが……」

「ふおっふおっ。そりやそうじゃろ、ワシも今まで忘れておったか

らの」

…… 食えないじいさんだ。

「うちは別にかまへんけど……」

「どーしてよ！？ おかしいでしょ！ 共学ならまだしもなんで寮にまで男子がいることになるのよ！？」

さつきから騒々しい奴だ……

「詳しい事は高畑先生かしずな先生に聞くと良いじゃろう」

「…… 分かりました」

それも任務だというなら仕方ない。従うしかないだろう。

「放課後にこちらが寮まで案内したげるな」

「…… どうも」

「ええって、ええって。どうせこちらも寮やし、それに……」

「？」

「そーいえばこちらまだお互いに名前しらへんなあ」

いや、うるさい方はともかく、そちらの事はある程度知っているのだが……

「……青山佳樹。よろしく」

「応世話になることになってしまったので自己紹介を軽くしておく。

「うん、こちらこそ」。ウチは近衛木乃香やえ。よろしゅうなあ」

「ああ」

「ほんで、こっちが……」

「だからなんで女子寮に男子が……！！」

「まあまあ、アスナちゃんや。落ち着きなさい」

「……本当に騒々しい奴だな。」

「ほらー、アスナも自己紹介せんとー」

「……神楽坂明日菜、よろしく」

異様に不機嫌そうに挨拶された。別に丁寧な挨拶を期待したわけでもないが

「ああ」

「で、いつまで学園長室におるんじゃ？もうすぐ予鈴が鳴るぞい？」

「へ？」

「あ、ほんまや」

「そのようだな」

学園長に言われて時計を見ると、確かに予鈴が鳴りそうな時間だった

「ちょ、ちよつと何あんた達のんきなこと言ってるのよ!？」

「ほえ？　だつてまだ間に合うし」

「俺はまず職員室に行かないといけない」

なんでも、教室には担任の教師と一緒に行く予定のようだ。

「そうなん？　ん、ならついでに職員室まで案内したげるな」

「……手間をかける」

「いえいえ、ほな行こか」

「ちよつと待つてよ木乃香！　職員室まで行つたらほぼ確実に遅刻

……」

「うゝん、でも佳ちゃん一人だとこっちの校舎の職員室まで道分かん思っし……」

「……ちよつと待て」

「プッ」

コイツ、笑いやがった……

「うん？」

「なんだ、佳ちゃんって……」

あだ名か？　だとしたらイヤだ……。公衆の面前でそんなあだ名で呼ばれたくない……。目立つだろう。

「え？　だって名前が佳樹やから佳ちゃん。変かな？　青山の青ちやんは変や思っし……。うっっん……」

……ちゃん以外の選択肢はないのだろうか？

「佳ちゃん、だって……。中2の男子が、ぷふっ」

「……」

いかん、俺とした事がこんな事で人を殴りたくなってくるとは……

「うっっん」

「……もういいよ」

本気で考え込んでいる近衛を見たらどうでも良い事のように思えてきた。

「そうけ？　ほな、職員室まで行こか」

「ありがとう」

そうして漸く学園長室を出た。

「まったく……しょうがないわね」

「神楽坂も遅刻になりそうなのにわざわざすまない」

別にこいつはついて来なくても良いハズなのに……

「もう良いって。木乃香は一度言ったら頑固だし」

「……みたいだな」

それから近衛達に連れられ少し歩き……

「ここが職員室やよ」

職員室、と書かれたプレートが下がっている部屋まで着いた

「ありがとう、助かったよ」

「いえいえ、どういたしまして」

「あつ、木乃香！ もうすぐ予鈴が」

キンコンカンコン……

「あ」

「……鳴ったな」

と言う事はあと五分で始業か。……間に合うのか？

「ギャ——！！？ 早く行かないと遅刻うゝ！！！」

「あはは……、ほなまた後でな」

近衛はそれに苦笑いをし、俺に手を振って神楽坂の後を追いかけて行った。

「……」

近衛木乃香……か。昔と変わってないな。俺は……どうなんだろうな？ ——今はとりあえず職員室に入ろう。確か担任は高畑先生……だったな。

「失礼します。今度女子中等部に移ることになった青山ですけど……高畑先生はいらっしゃいますか？」

戸を開けて職員室に入ると、俺の他に女子中等部に移ることになった奴らが既に集まっていた。

「高畑先生は……。あ」

そう言えば……俺、高畑先生がどんな人か知らないな……

「やあ、君が今日からうちのクラスに来ることになった子かい？」

「！？」

突然後ろから男性の声がしたので、驚いて振り向くと……

「おお？ いやあ、すまないすまない。驚かせるつもりは無かったんだが……」

30代くらいのおじさんがいた。だがこの人……

「いえ、その……高畑先生ですか？」

俺が全く気配を感じなかった……？ 多少警戒は緩めていたとは言えこつも簡単に背後を取られるなんて……。この人相当な使い手……か？ 見た目はただのオジサンなのに……

「ああ、そうだよ。僕は高畑・T・タカミチ。君は？」

「あ、はい。今度女子中等部2・Aに入る事になった青山佳樹、です」

「青山……？」

マズい……気づかれたか？

「あの、なにか？」

しかし、ここで動揺した素振りを見せてはバレてしまう。俺は普通に聞くことにした。

「うん？ ああ……いや、なんでもないんだ。それじゃ青山君、教室に行くでしょうか」

「はい」

初日から正体がバレてしまつては俺がこちらに来た意味がない……。何があつてもバレないようにしなくては

「あ、高畑先生お電話です！」

そうして廊下に出た直後、職員室から高畑先生を呼ぶ声が

「僕に電話？ うゝん、参つたなあ……」

ポリポリと頬を搔く先生

「高畑先生、私が代わりに連れていきましょうか？ ちょうど今手が空いてますし」

「しずな先生……すみません。では、お願いします。青山君、すまないね」

そう言つて高畑先生は職員室に戻つていった。

「――さて、私は源しずな。みんなからはしずな先生と呼ばれてるわ。貴方は？」

この人が学園長が言っていた人か。一応、覚えておくか。

「青山佳樹……です。この度はお世話になります」

「はい、よろしくね。それでは、行きましょうか」

「はい」

そうして教室まで歩いてる途中――

「準備とか手続きとか大変だったでしょう？ いきなり男子中等部から女子中等部だなんて……」

源先生が話しかけてきた。

佳樹「いえ、特にそうは感じていませんが……」

俺個人の荷物は無いに等しい。それに手続きは学園側にされていたので特に大変だったと言う事は無い。

「なら良いのだけれど……これから貴方のクラスになるA組はクセの強い子ばかりだけど、頑張ってね」

聞くところによると、俺が入る事になる2 - A組は良い意味でも悪い意味でも結構な問題クラスらしい。

「確かにあんな奴がいたら問題も起こりそうだな……」

学園長室でのやり取りを思い出してそう呟く

「？」

「なんでもないです」

そうしてクラスの前に着いた。

プロローグ（後書き）

この部分は次回からキャラ達が繰り広げる次回予告風にしたいと思います。

出てくるキャラと次話に特に関連性はありませんので悪しからず（出来るだけ持たせてはみませんが）。

第1話 ここが2・Aというクラスか（前書き）

時間的にはあまり進みません。ご容赦を

第1話 ここが2-Aというクラスか

「さあ、先に入って」

「はい」

促されるままドアを開けた瞬間、俺の目の前に黒板消しが落ちた。
俺がやや下がってドアを開けたのでそのまま落ちてしまったようだ。
俺は何事も無かったかのように黒板消しを黒板に戻し、教卓の横に立った。

「はい、みなさん前々から言ってたように今日から一緒に勉強する子を紹介します」

やはり、黒板消しの事は無かったことになったらしい。

「ハイ、では自己紹介して」

先生に言われ、一歩前に出て

「男子中等部から来ました、青山佳樹です。よろしく」

簡潔に自己紹介をして、俺が頭を下げた瞬間……

「「「いらっしゃーいー!!」「」「」

「わ」

いきなりの大声に少し驚いた。

「男子中等部からようこそー!!」

や

「これからよろしくねー!」

とか

「好きな食べ物は何?」

など、いきなり質問が飛び交う。……騒々しい。今日はやたら騒々しい日だな。

「はいはい、みなさん静かに。ではまず自己紹介からね。質問はそのあと」

やっぱり質問はされるのか……

「じゃあ出席番号順にね」

「じゃあ私からだにや〜! 私は明石祐奈、趣味・特技はバスケットボールだよ、よろしく〜!」

と、なぜかバスケットボールを抱えながら

「んじゃ次は私だね、私は朝倉和美。通称は麻帆良のパパラッチって言うの。よろしくっ!」

「……」

たかが自己紹介でこんなに盛り上がるものなのだろうか……？
そんなどうでもいい疑問を抱きつつ俺は騒々しいクラスメイトたちを見回した。みんな好奇心の目で見ている。当然……か？ このクラスに男子は俺一人なわけだから。

「！」

ふと近衛の方に目を向けると、笑いながらこっちを見ていた。そんなこんなで全員の自己紹介が終わり……

「全員自己紹介は終わったわね？ それじゃあ青山君の座る席だけど……あそこが空いてるわね。一番後ろの窓際よ」

「分かりました」

いまだに好奇の視線を感じながらも、指定された席に座る。

「じゃあ皆さん、私はこれから用事で出ますけど騒いだりしてはいけませんよ？」

「「「ハイ！」「」「」

ほぼ全員がそう叫んだ。……早速騒いでいる気がするの俺の気のせいなのだろうか……？

「そうそう、言い忘れてたわ。彼は共学試験が終わるまでの間、女子寮に住むことになってるから……みんな、寮でも仲良くしてあげてね？」

やはり行かなければならないのか……。それ以前に皆反対するだろうと俺は思っていたのだが……

「「「あははー、寮でもよろしくねー!!」「」」

どうにも俺の認識は甘かったらしい。……何故だ？ 最近の女子は皆こうなのか？ と内心驚いていると

「何でよっ！ 流石におかしいでしょ!!」

神楽坂が叫び、教室が静まり返った

「だっていきなり共学よ？ それになんで女子寮に男子を入れなきゃなんないの!？」

学園長室の時と同じく力説しているが

「えー？ 別に良いじゃん明日菜ー。面白そうだしー」

「……」

面白いか？

「良くないわよっ!」

「なんでー?」

「あたしは高畑先生みたいなオジサマならともかく、こんな同級生の落ち着きが無い男は大っ嫌いだからよ!」

すごく個人的な意見な気がする。それと、人を指差さないでほしい

「そうけ？」

半ば傍観者気取りでそんなやり取りを眺めていると

「はぁ……さつきからギヤーギヤーうるさいですわよアスナさん！」

誰だか知らないが立ちあがって神楽坂に向かってそう言った。確か……雪広？……まだ全員把握しきれないな。把握する意味があるかは分からないが

「何よ！ いいんちょはおかしいとか思わないわけ？」

俺は思ってる。

「確かに最初は思いましたわ」

「だったら……」

「だからと言って私達学生の身分で学園の決めた事に逆らうなど10年早いとは思いませんこと？ 学園長先生だってそれなりの考えがあるでしょう」

「うつ……それは……」

「だいたいあなたの反対する理由は個人的過ぎます！ 何ですか高畑先生ならともかくとは、それこそ教師と生徒。なおさら駄目に決まっているじゃありませんか！」

「そ、そんなの分かんないじゃない！ 誰も試したこと無いんだから！」

普通は試さないと思う。仕事あるんだし

「……ま、確かにそう言う見方もありますわね、倫理的にはアウトですけど」

「……」

それ、遠回しにダメって言ってるよな。

「でしょ、でしょ？」

「しかし！ 今一番落ち着きが無いのは他でもないアスナさん、あなたではありませんこと？ 少なくとも青山さんは落ち着いている男性だと思えますけれど？」

「うつ……うつ……」

あの騒々しいのを窘めるなんて……やるな。だが、どうやら感心してるのは俺だけでなく

「流石いいinchよー」

「やるうゝ」

などとあちこちから聞こえた。委員長……ね。ところで近衛……はやっぱり笑ってる。流石……と言つべきか？ そして神楽坂は……

「分かったわよ、仲良くすりゃ良いんでしょ仲良く！」

逆ギレした。それに誰も仲良くしろとは言っていない。肩を怒らせながら俺の前まで来て

「改めて神楽坂明日菜よ、よろしく」

最初の挨拶と同じく、不機嫌そうに言って右手を出して来た。これは……握手ってことか？

「……よろしく」

差し出された手を握ろうとした時

「じゃ、私は他に仕事があるからこれで行くわね。みんな、くれぐれも静かにね」

源先生が出て行った。まだいたのか先生……完全に忘れてたな。そうして源先生が外に出た途端……

「さーて、皆さんお待ちかねのしっとりもんタイム!!」

と、一番前の席の朝倉？ がそう言った。

「……イエーイ!!」「……」

……騒ぐなって言われなかったっけ……？ さらに

「好きな食べ物？」「趣味は？」「休みの日とか何してるの？」

などと、みんな声を張り上げて矢継ぎ早に質問してくる。……そんな一斉に言われても何言ってるかわからないし……。俺がそう思っていた時

「皆さん!!」

再び雪広が立ち上がった。

「そんなに一斉に質問したら青山さんが困るでしょう! 質問をするなら一人ずつ順番になさい」

こいつ……良い奴だ。

「確かにそうね」

一人がそう呟く。

「なら、改めて……質問がある人は順に並んでー!」

しかし、朝倉が言い終わる前に既に質問があると言う奴は並び終えていた。凄いなこの無駄な団結力と言うか何と言うか。……そして質問タイムが始まった

「好きな食べ物は何に?」

「……いや、特には」

教室が沸く。……変なのか?

「趣味は何にかある?」

「……特にこれと言ったのではない」

「本は好きですか？」

こいつは確か……綾瀬だな。近衛の近くにいたのでついでは覚えた。確か本だったか？

「本は読むが、好きか嫌いかと聞かれると分からない」

読んではいるが、好きか嫌いかなどと意識したことはない。ただ読んでいるだけだ

「ほう……。ならどんなジャンルを読んでいるですか？」

と綾瀬が2つ目の質問をした時

「あ、ずるーい！ 夕映吉、質問は一人一つだよー！」

「え？」

明石……だったか？ 別に数なんて決まって無かったような気がするんだが

「そうでしたか。それは残念です」

暗黙の了解。と言うやつなのか、大人しく席に戻った綾瀬は何やら

「ハルナ、のどか、このかさん、後は頼んだですよ」

近衛達に言っていた。そうして近衛の番が来て……

「うーんとな」

悩んでいる。……さつき綾瀬達と何か決めてたんじゃないのか？

「佳ちゃんはどうどんな部活に入るか決めとる？」

近衛が言った瞬間教室が凍りついた。そりゃ、いきなりあだ名で呼べば驚きもする……。しかし、凍りついた原因は俺の予想に反して

「部活……」

「部活」

などとみんな部活の方に意識が向いていた。……そんなに自然なのか？ あの呼び名。ふと神楽坂の方を見ると

「プツ……ククク」

やっぱり笑ってやがる。そしてみんなの視線が俺に集まった。……どうやら答えないといけないようだ。

「いや、特に決めてない。まだ来たばかりだから、こちらに慣れるまでは帰宅部でいるつもりだ」

無難に答えておく。部活などやっていては、任務に支障をきたす可能性があるので入るつもりは毛頭ないが。

「ほうほう、ありがとな」

そう言つて席に戻つた。戻つた近衛は綾瀬と後……確か宮崎だったか？ その二人と何か話をしていた。そして……

「じゃ、次は私の番ね」

確か早乙女……だったな。ちらつと近衛たちの方を見ると早乙女をジッと見ていた。なんだ？ さっきの部活の話の続きか？ それとも綾瀬が言っていた本の話か？ 質問を待つと……

「ケータイ持つてる？ 持つてたら番号教えてくれない？」

早乙女がその質問をしたその直後

「あ、私も知りたい！！」

「私も私もー！」

などの声が続出した……

「まあまあみんな落ち着いて。私が聞いた後みんなに教えなければならぬ」

教室が沸いた。……俺の意思は無視か？

「で、ケータイ持つてる？」

「まあ……一応」

なぜか視線が集まっているんだが

「出して出して」

「あ、ああ」

俺は言われるままにズボンのポケットから携帯を取り出して机の上に置いた。任務用とは別のダミー携帯だ。……使った事は無いが。

「へえ……じゃ番号教えて？」

「それなら後で返してくればいい」

携帯を早乙女に渡した。

「サンキュー、じゃあ後で返すね」

早乙女は席に戻り、当然みんなも集まっていた。……席に残っているのは

「まさか……な」

何故かこちらを睨んでいる人に

「……」

全く興味無さそうな人

「……」

あの、お手玉をしてるのはザジ……だよな？ 後は

「んー」

長瀬……だったよな。ぐらいか。ザジは分からないがこの3人……
強いな。隙が無い。どれくらい強いのだろうか？ 俺には関係ない
ことだが……ほんのちょっとだけ気になった。

第1話　ここが2 - Aというクラスか（後書き）

朝倉「ほいほいほーい、2 - A出席番号2番の朝倉和美だよーん！」

魔「相変わらずテンション高いツスね」

和「ん？ あんた誰？」

魔「うん？ 俺、作者」

和「ああ。別に作者には用はないからどっか行っってて良いよ」

魔「……しどい」

和「——ってなわけで、最初の次回予告はこの私、朝倉と新人の青山君にお任せあれっ！」

佳「……」

和「おや？ どったの青山君？」

佳「何故俺がこんな役を……」

和「いーじゃん、いーじゃん。ここは本編とは関係ないんだから気楽に行こっ？」

佳「帰る」

和「帰るたって、女子寮の場所分かるの？」

佳「……」

和「さ、ちゃんと次回予告が出来たら寮まで案内してくれるからさ。近衛が」

佳「はぁ……やれば良いんだろう、やれば」

和「テンション高くお願いね」

佳「すう……。次回、「女子寮って男子寮より広いんだな」みんな、よろしくっ……!」

魔「ほとんどヤケクソじゃん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2087s/>

魔法先生ネギま！ ～光と闇と龍と～

2011年10月8日17時22分発行